



新勅撰和歌集
下

特 別
^4
8099
9(2)



84
8099
9
(2)

<2001-023>



Handwritten text in a cursive script, possibly a letter or a list of names, written in dark ink on aged paper.

卷之七

蘇氏文集

Additional handwritten text, possibly a title or a reference, located at the bottom of the page.

新物撰和歌集卷第十一

恋奇一

海不知

後人云云

夢よふとまじき人ぬ人の恋しきい元よきちかひの境れ
 いぢりありきとん今そふまにぬ人そらつる物には
 是日し知あつたれはつるもぬ人をも恋ひてはる
 あつたりの海よき一すの白波のきりてあつたれはる
 名見さうとん人ぬれにきり浪よすの玉露よらつたれ
 那波のつる元よ新よけりあつたのひよとんを連り
 あつたれはるのつるい海よきとぬ恋も我のすら
 中

女よはつりきり

葉平朝臣

して元よとん胸よとん自とんさつらひの女よ茶
 始て人ははつりきり 権中細言教忠
 重よ升よとん雲ぬにみちり敬のらとんわらふとんあふ
 中
 夢よとんみちりをぬん勢のをこれん意にゆけはる
 下欄よゆらつたれはつるい海よきとぬ
 忠義云
 色よとんいさつたれとんすり今重よとんはつたれつるあき
 中よゆらつたれはつるい海よきとぬ

中納言朝忠

いそののたもゆをよつう人きありわたりて後い

や

平院伯隆

ろく人やえふあしんこゆたりわたりてい

和泉式部をけり 大宰師教道新主

ららせくもありあ物も中いん新いさそそ是款を言

や

和泉式部

ららせくもありあ物も中いん新いさそそ是款を言

人あじああとお培いゆらうと女のたわすつて

ありまにわあしゆよるゆわをきけり

存東よん

あやせんあやあしぬもわく新いさそそ是款を言

類一らゆ 道信新臣

いしそそわあ中もあそあそにわのそそあそあそ

相損

伊くうはて津定あもあそいあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ

藤原義春

人あそあそいあそあそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそあそあそあそあそ

けし付しきり

人宰人貳る遠

日影うしとあすといふてこころうらむのえたる物に

影不知

躬恒

山はよほく早田のたふたむけぬ身とて

女よつらきり

業平初后

神女もあまのかりやとわらぬかきとて

や

久人しり

定るらむつらやうはばねく塩平とて

新とて

小町

漆入のむしりえふく舟の巻くそとて

みづのあまのゆきとて漆は若くは

後人しり

いよもなきはねのしり酒はいと細

恋まの衣の袖はあまのつら

坂は鏡艶書のあま

してをうとや

権大納言云

あまの道とておめり

や

康資王母

源うらまは深の川

五十首より久のりる小

神祇伯那仲

恋の山とけと小降の露もく合しつらとあう神る

久安百首をひり恋奇

待賢門院歌

かこふふとあよまじきそとれ若のふらふらにちせあ
神あう山井の清あいつそは人あもさるふと方余

皇太后宮女史俊成

らうはらまといせあ松の木松はほくあせうはらまとい
源川神のみまといわさかありのりあはれあ物といはれ

清輔和歌

とたけいふいあいのこせとら物よりあやい神そよま
日ろ恋といととくはうらうらもあはれあはれあてあうとい

二条院沙時恋あやういふ

於久細言宗家

人あははほむとこよよせきう神て神よあまらあはり
百首神より人あはれあふ思恋のあうとい

前久細言資賢

あしあうかといえあはれあまらあはれあ
家よ百首より後あういふ

後は此の文道が言白の改定

記す事とて神を記して之をたゞの事よいてあり

皇嘉の院列あり

あしはるかにしる事ありてはかきかたは神の御座

直秋門院丹後

神の上は後をいふははるかにぬくまはるかにしる事あり

皇太子之言と事後成

千の卯月のこととては自らいふ事ありし事あり

形は頼朝の命とては自らいふ事ありし事あり

忠臣

ふみとてはるる事ありては自らいふ事ありし事あり

西郷は師

あつらひや事ありては自らいふ事ありし事あり

正三位家隆

今直秋の事ありては自らいふ事ありし事あり

直秋の事ありては自らいふ事ありし事あり

直秋門院丹後

ふみとてはるる事ありては自らいふ事ありし事あり

源師光

ふみとてはるる事ありては自らいふ事ありし事あり

松中納言定家

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

坂河院は百首言まらりたる忠意

お中納言連藤原

まゝに言のたまふ下はのこもいふ言をさう人といふ

藤原仲文納言

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

基俊

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

清盛納言

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

年蓮法師

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

参議雅治

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

右衛門督為家

おのれを破るはむらさきよあはれはまゝに神ありて

この世にも未見無とあるはと云はるる

そらの次よ 師教

宗廟の神を祀る所のついでと云ふ人か

無方積約なりふ 大細言実家

久見初り無方のすまふ物なりと云ふ其意あり

正三位持家

せくと云ふやと云ふは無方積約なりと

入道二宮親王家よ百首方積約なりよ

入道太子政大臣

眞の神の元也よは海なりと云ふは

百首方積約なりよ

前用白

この世にも未見無とあるはと云はるる

宮白衣大臣

わが世の神を祀る所のついでと云ふ人か

三条院六條

宗廟の神を祀る所のついでと云ふ人か

二條院瀧波

此なり神を祀る所のついでと云ふ人か

殷富門院太輔

無方積約なりふ

うらまのこたへてのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむ

持入細云家良

悲しいのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむ

お言白家方合小寄線恋

正三位家隆

千鳥のたふしむのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむ

家方合小

後京極坊政家と政方

うらまのこたへてのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむ

恋方合小

藤原頼氏朝臣

うらまのこたへてのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむ

前嘉次郎盛方合小

藤原盛方朝臣

思ひのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむ

大京之史郎物家方合小

後清和天皇

人言のたふしむのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむ

平恒正朝臣方合小

源有房朝臣

源神のたふしむのたふしむのたふしむのたふしむのたふしむ

道因は師

しききもとうれあもむる海はるまはるる川瀬なるん

歌うらひ 平重時

うらまゆふしとさるる海川はるる浪の神は清ら

百首歌をけりて

ぬれは師

海の家よりあはれうとせはれりてしききなるる

建保六年内裏より合意奇

権大納言忠信

巻のり空師の川は海風よまじくむその歌くをけり

歌あはれ 侍臣具定母

さう後ては若菜入とのふ川あててを清ねぬるる

正三位家隆

なむいひみもやなすう水乃陀の江もあはれむ

恋乃をよ積ゆる 権中納言長方

落津川もやぬの河も空よりてとけはるる

皇太后また文俊女

うらまゆふしとさるる海川はるる浪の神は清ら

新勅撰和歌集卷第十二

恋奇二

寛平治時きこひの文礼言合ありこ

よふ人さす決

夜中にあふ我身のほしきもの人になはしよきゆりゆり
夏草ありとすこひのあふりたの下にのこるわのほりかれ
年とくもゆつふ富貴のゆりあふ思ひ我を悔しめり

下腐すゆりゆり時女よほりゆりゆり

清信云

非よほあましむしをりき物一志らみこり決てまけり

歌一りゆ

伴辨

川のあふりてとらふもやほりやあふりゆりゆり
涼涼ありゆりのこ糸あふりやあふりけりまてとらふゆりゆり

女とみんきけり

福徳云

そとあふりてとらふもやほりやあふりゆりゆり

や

あふりあふり女ま

あふりあふりてとらふもやほりやあふりゆりゆり

非を月ほりゆり女よつゆりゆり

东三條入道栲次大政大臣

あふりあふりてとらふもやほりやあふりゆりゆり

歌一十次

中院伯道

庭よりこけしとくぬおひるよふもあはれ池の踏ぬりこいれ

道信別後

藤原の物なまらふ志かき夜神やみくはこまりあはれん

よかんちん次

か系をえぬはまはむりよははる籠りさめんのさうと

庭儀ぬあまのうら深はるらとてふまうらあまもさうたの

依たりと松山にのりあまのうらとてくれとあはれぬさう

系まのこころ人の想はあまのあまのあまのあまのあまの

をいりから地り池ふとていりていりていりていりていりて

あさかーとあつやほさうらとあまのあまのあまのあまの

山地りのねらふとていりていりていりていりていりて

白山のあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

廣川女王

庭儀はらう車にせうゆつとていりていりていりていりて

九条太大臣

面をよひはねる原とあまのあまのあまのあまのあまの

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

持中細玄教忠

あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

たすけおころの女よははらけり

右近大お道徳

いぢのしほもむじりぬむねのほたけはせよ

歌あはれ

傍人しりき

おぼろきとはそのちていかにもぬるまのほたけ

むふあもむらり日ぬりしおの木れ言のたまひて

いけり物なす時ひさしはあはれよ袖のあはれん

伊よむ山言れしおらあしそ人のたぬたあはれん

木と葉とゆかりふえあすききゆ魚のけし業

平朝臣よはらけりきり

おしけいしりあはれもあはれに本葉よりえふと

昔のえ良のたふしけりけりけり

やりの

修理

そくしんもたかやうせん異行のよとてい

堀河院女房艶書とやうりよ積り

堀河院中言と録

いししんもいふや作ははらけり

やりの

お大納言後實

やうも娘しんを都祢垣やとてとく

久安百首よりけり

大炊河門右大臣

手にて中々をむのそほりし今より不違とてお

左京大夫右補

年如もたはるし其後ひねりぬ物も人毛とて

城河院百言言たてまつりし時

持中納言因信

今もして照神のまげしをそとあつたあつた

忠言後ゆりふ 春永為忠納信

何言のち本れこそ此家もあつた物の中

建仁元年八月のう合よ之忠

入道左大臣

約しんことをもとくはなすよはれぬ

えのよれとも忠久忠といふを

つみくに 河野

いそつとていふし一月のむら

建保六年四月庚申之忠といふ

守り 持中納言定家

忠言のあつたところを年々

糸織雅雅

いそつとていふし一月のむら

建保三年因大臣家百首之讀物より小若而志

つらふとらあり 源有長朝臣

ふゆらふとに見ゆる松の葉は秋をばはるく人と志は

庚申之志あり 源家長朝臣

ふゆらふと年改のさかぬ年改めとてはるく未の松の

ぬ新は師

あさひやうのうはる中たをばはるくかきしほむ

歌不知 殷田門院太極

逢みくもゆぬかたのあつ物とてはるくかきしほむ

百首より一つ付 宗徳院河野家

とらふふとら葉たは成ぬる葉とてはるくかきしほむ

とらふ世の葉ありきんはるくもあつてはるくかきしほむ

権大納言隆季

あつたの葉のきたるはるくかきしほむ

前田白家ら合小若鳥志とてはるくかきしほむ

曲侍因子

とらふのこゆつをばはるくかきしほむ

あつたの葉のきたるはるくかきしほむ 殷田門院太極

とらふのこゆつをばはるくかきしほむ

中文字少将

ふふきし悉務すもよ言とて中きももたむお坂の

祝詔成茂

あ坂のらゆまの道なまてゆかぬ言はたのいひは

賀茂重保社乃事合しゆらふ悉乃たよら

暖命法師

あらふ言とて言の行ふとと然とあらん

存原伊弉約臣

悉乃たはた言よの言はたむらんともた

言とす

於中細言長方

伊弉の海行方うらんかまひつめ事あり其言とふん

兼連法師

あら海のさぬ海よと塩のこもあやめり約臣

入道二ふ新主家百首寄物急

泰次雅治

うらむお那岐のさぬ言とるやうに前まはしり大

正三位知家

あらたてもつ方れに焼塩のむい言くまら物れ

用白丸大臣家百首寄物急

源家長朝臣

あらたてもつ方れに焼塩のむい言くまら物れ

意のう積約方小 藤原朝結物信

ねのぬまーまからぬよやく舟の船の船の思ひあり方

兼延は師

去勢あまきくーと舟入はく着にのこきく人と趣り

殷富川院太物

うりけりよき浦波ひてのこきよぬる神を金と

崇徳院四時ふりよとれこも思意あらけりよとけり

シ方方小 皇太后言と文俊成

日る意六浪に波の浪いされおつこいしとさうくふら

坂河院四時殿とあく船とけりりく十首う積約

らりに塩竈とよこゆひり

控中納言回信

うしむも表はさうしれ浪と浦は焼きたる舟の船の終

家よ百首う積約方小不遇意のむと

後法性入道前宮白太政大臣

わの意あとの浦うらむを貝じりくれもぬる神の

百首款をともうらり方時意方

入道おと政大臣

る見くく人のんはうすもよぬむ深のそ積る終は

後京極権政家に百首方よませゆき方意方

高松院右衛門作

破れしむらさきのうらみとてうねるに 志はなほあふく海を

春原隆信朝臣

ふたつめがくまをなれ我神也 暎をわぬ故乃下草

影の波

正三位春原隆

まろ海の入は海ふさの葉はらふとて 今もあつて

女よきつりきり

お大細云隆房

人よきつりきりよとて草はらふとて 枝まはらふ

女よきつりきりよとて草はらふとて 枝まはらふ

左近中将云

いそいでもふさくせんが 影のたれつりて 枝まはらふ
題をさくらして ちよきつりきりよとて 草はらふ

前中細云回通

下ふのいそきつりきりよとて 草はらふとて 枝まはらふ

無名を讀むる

春原頼氏朝臣

けしきもあつていそきつりきりよとて 草はらふとて 枝まはらふ

百首をよみたるふし 不遇意

開白を大匠

のりまのいそきつりきりよとて 草はらふとて 枝まはらふ

百首をよみたるふし

入道前大匠

あふゆくと筆紙を燈に方へしゆき其のよきとて

糸織雅純

みりけい乃くまうすけとかりおたよふおつゝやうしん
はねもあつゝの露も道にたいてくもあつらん

建保六年田原守合恋奇

三位知家

人あもれつゝかうしられとてはるもまじけぬを

新物撰和歌集卷第十三

恋奇

さふとそつちの女よはつゝとて

實方朝臣

大井はかきよらふむらさきやうきさうきとてす
女小けいゝらうらふかかゝりて後ゆきゆ

郁芳門院安藤

あふゆくと筆紙を燈に方へしゆき其のよきとて
百首うちいひあひ 崇徳院以制衣

あふゆくと筆紙を燈に方へしゆき其のよきとて

後法皇入道前白家百首言後約る初遇

皇太后宮大夫俊成

あはれいそをそとに候ふとてさよとにのむる言まはし

皇太后宮大夫俊成

うけしきもいそもたけしきもあはれいそをそとにのむる言まはし

法皇寺入道前白家百首言

基俊

あはれいそをそとに候ふとてさよとにのむる言まはし

基俊

基俊

あはれいそをそとに候ふとてさよとにのむる言まはし

基俊前白家肥後

あはれいそをそとに候ふとてさよとにのむる言まはし

基俊

基俊

あはれいそをそとに候ふとてさよとにのむる言まはし

基俊

あはれいそをそとに候ふとてさよとにのむる言まはし

基俊

基俊

あはれいそをそとに候ふとてさよとにのむる言まはし

基俊

よりのまじりしはしつらふらん

源有長朝臣

かゝるさばよとすらんしつらふらん

延暦二年の秋

権大御言家良

うらむたのまじりしはしつらふらん

延暦二年の秋

相模

ゆゑにまじりしはしつらふらん

陽成院の命

續人

行とあり命よとてあつたはしつらふらん

延暦二年

ゆゑにまじりしはしつらふらん

家言

後系

早すのまじりしはしつらふらん

延暦二年

續人

こひのまじりしはしつらふらん

延暦二年

八条院

あつたのまじりしはしつらふらん

田大

なほくらに神ありてわのしらすとてわくそのひらり書

権大納言忠信

笑とくちぬ衆とくくくを曉ひくきん氏のそそなく

左近中将基良

いよはそわいもくはるきん口のわく人のとれあは

前用白家言合小言鳥とくいぬる心とよく徳芳

中まがわ

あふきのゆつをるそく病のにえうあまたしあは

子あひ書言言 侍臣具定母

書れとくそのあくも程あさ病をわわぬ本よ清め言

坂河段よ百首言をけり時後朝慈

系権前言白家肌故

松川のぬりあそけよけあつめはあふり書とまは

後は権寺入道前言白家百首言

皇太后言大文信成

こまは忘すにすむい世や浪よあまも書とまらん

二条院よ百首言をけり後朝慈

太宰大貳重家

あひまもゆりへのあけき藤のけし神はたらしを

関白左大臣前百首故知方

源家長初巻

あはれいふはこころにあらはれしは
あはれいふはこころにあらはれしは

あはれいふはこころにあらはれしは
あはれいふはこころにあらはれしは

藤京隆祐

あはれいふはこころにあらはれしは
あはれいふはこころにあらはれしは

あはれいふはこころにあらはれしは
あはれいふはこころにあらはれしは

あはれいふはこころにあらはれしは
あはれいふはこころにあらはれしは

権大納言實因

あはれいふはこころにあらはれしは
あはれいふはこころにあらはれしは

藤述公

あはれいふはこころにあらはれしは
あはれいふはこころにあらはれしは

中納言兼備

あはれいふはこころにあらはれしは
あはれいふはこころにあらはれしは

源宗干御后

白露のよき秋まじりの御ふくを我中くありけるに
女ももしくらゝるりてけりてきり

業平御后

秋のそ下いもやこれ御ふくの夕ひまをぬれおのり
影しつ次 延長御製

あそのと御まはなるもくろあもぬれをまをれし合をぬれ
朝よひのうきり 太宰守教道御製

恋とてをれつ祢のよきふんし御ふくのいそいふあり
也ー 和泉式部

よるけの事ともあひては御ふくのいそいふあり

影しつ次

あまよこみくゆつる曉のそとをいふのうけりありけし

徳徳云

あまのよき秋まじりの御ふくを我中くありけるに
家ももしくらゝるりてけりてきり

後京極御后御前御製

かゝり御まはなるもくろあもぬれをまをれし合をぬれ
晝迄 大苑御製

あまのよき秋まじりの御ふくを我中くありけるに

無常とて續約なり 権中納言親宗

うた神のそめさきまはさるゝりも文の由とよみそまの
後京極坊政家百首より久の竹をゆり

小の臣

震したり雨と嵐とを身ふりけしむのこゝろと
ふありし時をまよふとて續約小の臣をゆり
無常とて續約なり 臣三位頼政

清浦朝臣

思ふと暮れらるゝあをなく海とやとけらるゝえんか
作ふととさや一巻抄のそめさきまをいさるゝ
久安百首より久の竹

久安百首より久の竹

待賢門院坂河

長れとていふ人もあはれぬよふらとてあはれなりん

百首より久の竹

か用白

みかへれを雲のうらふあはれむとらぬ中の長を後みん

権中納言忠信

うらむら園れうらむらうらむらうらむらうらむらうらむら

形不知

春永永光

いづれもさたのじもけしむるの雲れうらむらうらむら

師え方合しゆる小恋の心をよめる

藤原隆信の信

恋ふらんわらうと毎はく好も生てし心も地はなほ

後は燈の入道前用白家百首を頼

俊通は師

あふ果のなをばなごうとこ一程より小竹といふ人

歌しり次

よ丸人志る次

玉乃との様くみくまなれおのよふにやうまのゆふいぬ

二条院皇后文常法

とくればあやしくしるの夕暮れ毎とくぬさしりるふ

建礼門院右京大夫

馬の突はくをせうせいのあせきし馬のしん

田ぶさういりるのこころいりる次とよきりる

事よきりる

高松院太清の信

こころを又いりるは知あつこころいりるの書

恋方鏡のりる

中文の得

いりるしんをいりるあつこころいりるの書

百首のりる

後京極坊政方右大臣

涙をく袖ふたしあきらむるしんをいりるの書

うらみのぬらもあきらむるしんをいりるの書

式子内親王

正徳二年の春より海防の御事ありしに御事神を
建保六年由裏方合意奇

前田大臣

相傳や我方のことに結壇の事ありと云ふ人にも
授中納言定家

ふんよりかの浦にありし御事ありしに御事神を

歌一ツ次

権中納言長方

志願の事より御事神に御事ありしに御事神を

正三位家隆

その御事神の御事ありしに御事神を

平忠度朝臣

その御事神の御事ありしに御事神を

源家長朝臣

その御事神の御事ありしに御事神を

吉原法師

その御事神の御事ありしに御事神を

百首ありしに御事神を

正三位家衡

その御事神の御事ありしに御事神を

この歌あはれ 徳倉太右衛門

あはれなるこの山は松の多き山なりと云ふは

由大匠のゆかりの家に百の言はれり小若山と

あはれなるを お開白

あはれなるに道徳ありては心と云ふは松と云ふは

あはれなるのゆかりの家に百の言はれり小若山と

指中納言定家

くちの松の清き水とて大と云ふは心と云ふは松と云ふは

正三位家隆

あはれなるのゆかりの家に百の言はれり小若山と

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

新初撰和歌集卷第十

恋奇曰

題不知

人磨

夕草の志きゆえんと仰る若妙のうもほひうてに
あやしのふと風よひのこもさういぬは移るも

小町

本ぬ人もまじりてあやしくつねのまじりては業ありかたん
そのまじりてんそははらもんまらわあふねのさき

在東後春

忌服のたよりのうらさうにえうらうらおひをえあひの

後人不知

あふもに思ふらんそまきれあふもはあふも

女よひつりきり 後徳云

あふもや下もいものうらつん我は人のうらめ

あふも一り次 延茂評歌

あふもにえはうらゆき第一も人のうらめいりけ

九条右大臣

あふもにえはうらゆき第一も人のうらめいりけ

後人不知

あふもにえはうらゆき第一も人のうらめいりけ

あついでしつゝのちの昔の事をよめるに
いせの海の船もあつたといふは
あつたといふはあつたといふは
あつたといふはあつたといふは

女よしのうらな

吾邦の元良親王

あつたといふはあつたといふは

あ

平中興女

あつたといふはあつたといふは

あつたといふは

あつたといふは

あつたといふはあつたといふは

あつたといふはあつたといふは

あつたといふはあつたといふは

あつたといふは

あつたといふはあつたといふは

あつたといふは

あつたといふはあつたといふは

あつたといふは

あつたといふはあつたといふは

あつたといふは

あつたといふはあつたといふは

躬恒

俺御は今も... 御は今も... 御は今も... 御は今も... 御は今も...

采女明日香

みつと... 采女明日香... 采女明日香... 采女明日香... 采女明日香...

右近

あひみ... 右近... 右近... 右近... 右近...

清信云かおよゆる時けう...

或る敷度親王家大和

是... 或る敷度親王家大和... 或る敷度親王家大和... 或る敷度親王家大和...

想ておのゆる時

内親王

字子

露... 内親王... 内親王... 内親王... 内親王...

中務

身... 中務... 中務... 中務... 中務...

歌... 歌... 歌... 歌... 歌...

二条大皇太后言大貳

風... 二条大皇太后言大貳... 二条大皇太后言大貳... 二条大皇太后言大貳...

あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
坂河院は格書のあそびくろく

田沼内侍

人あそび神を病けとあそびくろくあそびくろく
あし

大細云忠教

あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
田沼云と云くろく

権中細言俊忠

あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
百首歌くろくあそびくろく

前開白

坂河院は格書のあそびくろく
あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ

侍臣具定母

あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ

あし細言隆房

あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ

直林門院丹後

あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ
あしからしき世のふとらぬいもあそび神のあはれ

俊恵は師

日守りあよきまうしとこ我たのりしり我をさしりあを(遊)
逢不遇意あなを 二条院瀆政

目あまよかよゆららと白雲はきはらふとあふん
歌しう次 入道前太政大臣

鳥あまよまはこふふとて道しとあねのまじし
鎌倉右大臣

日守あよきまうしとこ我たのりしり我をさしりあを(遊)
前大納言隆房

そらうらわらたれいふかきくらゆきをあつたる
兼連法師

花とさぶらうしとこ我たのりしり我をさしりあを(遊)
前大納言隆房

長月の舟あまよまはこふふとて道しとあねのまじし
文由

三つあまよまはこふふとて道しとあねのまじし
八条院右大臣

吹くしあまよまはこふふとて道しとあねのまじし
後直は師

日守あよきまうしとこ我たのりしり我をさしりあを(遊)
秋意といふをよめたり

入道前左政大臣

秋のつゆの鳥をさすかたのこも悉く交りて神也やん
りつとあはれもあやめつれん所毎にまはるる無乃後よ

内大臣

もろくの袖をそよよき田舎よそのあやとたひもむ
むらうつ

侍従具定母

を道くして梅よあやめつれん所毎にまはるる無乃後よ

中宮従馬

月影のつゆをさすかたのこも悉く交りて神也やん

藤原教雅右大臣

面ひのつゆをさすかたのこも悉く交りて神也やん

右京資季朝臣

白妙のつゆをさすかたのこも悉く交りて神也やん

恋うあましく懐ゆるふ

民部の成範

たふしのつゆをさすかたのこも悉く交りて神也やん

右近具定母

あふのつゆをさすかたのこも悉く交りて神也やん

左京幸清

うしろのつゆをさすかたのこも悉く交りて神也やん

床蓮法師

うん代に後にも感ずまうふ小面けれ思ひこころんれ

後恵法師

こころやいぢふふにうぢせにけりふも思ひこころんれ

左近中将公衡

契しにかたむらうかえ思ひけりふも思ひこころんれ

前大臣公忠良

世のうぢも来りていけん侍の宗の申にうぢも思ひこころんれ

頭公光

尺取の宣旨

大見に新しき人も感ずるらんまじりてふ般大思ふ

和泉式部

みえもせん人しきむ人と朝正にたててはじふ殺しめり

誓のわり物とゆくは歳よりきふのそあいの打もけりん

九条太政大臣中およゆけり時そゆてのら花乃松

つきいかり伝人ゆき

持中納言定頼女

公母は思ふとこ思ふ思ふたつ花おえを松のみも思ひ

身子院よきけり

春原恒貞女

こころにまじりて思ひのち花とまを思ひこころんれ

女よけりてきり

藤原高文

かこ時を思ひこころんれ思ひこころんれ思ひこころんれ

歌三三

藤原惟成

あつきの夜とせし籠つて寝るもまはれぬ神のちとむ

和泉式部

あまを玉のをにすのむけに重なるつとて此とてあ
まよほと籠えむつとむとてあまのちとてあま

續人三三

逢ふは今の時のこと思ふも思ふもあつたをありまは
らふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
あつとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
別くの後に思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

あつとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
あつとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
あつとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
あつとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ
あつとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふ

新勅撰和歌集卷第十

恋歌五

淡奥洞よまらるるて女よけりりもろ

業平朝臣

とけよとせいとくがよ道そりれつらみれなくもろろく

頭中将よゆりり時忠弟の紅葉しつらとよの中に入

て女のそとにいつらうて

徳徳云

あしき風をよほして思ふ事忘れよあまろくもろろく

後人しつ

いそふ程ふあまは思草いそひうの露やとけ

新古今

表みとそやうのうをたひういそを道いそはれ生

いそとえふあかか形いそ能行の春忠統いそ命いそ

いこのとれらあてふれ者いそいそとあにれ神も建

むろとあて候よらて捨置は後てれらあていそ思

あ事とむろとけらたを目とけいそあていそあ

人をいそいそやうとんむろあけいそあていそあ

あていそあていそいそいそいそいそいそいそいそ

元孝天皇御歌

月乃うらみ枝とさふや咲のさくれありさく地すれ

湯原玉

ちよひさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

貫之

こふと月ふさふさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

和泉式部

こもあふはさきさきさきさきさきさきさきさきさきさきさき

赤澤太清

そのさつとあきよとも之雲の月とふりゆりゆり

右幸大貳三遠

おなじあつちもえいさうにさういさういさういさういさういさう

道信朝臣

おとこいよんかふさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

そのちつちつちつちつちつちつちつちつちつちつちつちつちつ

よふ人さう次

逢にさかたあめよさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

相模

なまらつ月ふさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく

はげし入道お開白田大長よのきさうすおおにさ合

ゆるりふさくさく

坂内院中文上巻

建保六年丙辰三月廿一日
月未悉しとあるをよきとす

皇太后太后文後成

建保六年丙辰三月廿一日
二条院攢波

建保六年丙辰三月廿一日
赤陽門院越前

建保六年丙辰三月廿一日
正三位家隆

建保六年丙辰三月廿一日
殿田門院太輔

建保六年丙辰三月廿一日
持大納言家良

建保六年丙辰三月廿一日
右京左衛門尉信朝

建保六年丙辰三月廿一日
正三位家隆

建保二年丙寅三月廿一日
正三位家隆

池ふとむと一ゆふれを月神若少子夫くくそふ
標恋といふをとも久のゆきり

大鏡の首歌

そふ衣る色と着らひじや〜と月とそふはつるを思ふ
百首奇

式子回歌王

ふふまじま終よ〜いものゆぬじや〜と年のだまらぬ
歌〜次

大細云実家

うら歎ふ終〜終〜とまもまじもみで比毛曲に〜り
友と中将の御

たむの家のかよふ

たむの家のかよふ〜終〜りいそをさ〜とつ悦りあふ
友と中将の御

友と中将の御

友と中将の御〜終〜りいそをさ〜とつ悦りあふ
道因法師

友と中将の御

友と中将の御〜終〜りいそをさ〜とつ悦りあふ
友と中将の御

友と中将の御

友と中将の御〜終〜りいそをさ〜とつ悦りあふ
友と中将の御

友と中将の御

友と中将の御〜終〜りいそをさ〜とつ悦りあふ
友と中将の御

百番方合よ 二条院讚岐

あはれしくつらみりきり無うのそくうた神のまはりの夜

悪女積り方合よ 存永重頼女

奏しもくしむくは受あうううううもめうく神の

夏来恋といぬわをふんゆり

梅窓使兼宗

夜虫もあはれたのそくうた神のまはりの夜

野うらみ 権大納言家良

床のうらみと山あきいふの火のあきとく神のまはりの夜

建保六年田原方合よ恋方

権中納言定家

あはれ無う衣あはれあはれ無う衣あはれあはれ無う衣

後三位範宗

あはれ無う衣あはれあはれ無う衣あはれあはれ無う衣

野うらみ 後三位範宗

あはれ無う衣あはれあはれ無う衣あはれあはれ無う衣

お開白家方合よ山家又恋といつうあはれあはれ

野うらみ 正三位知家

あはれ無う衣あはれあはれ無う衣あはれあはれ無う衣

建保三年田原方合よ

存永信實朝臣

東海志より一考と云ふは一考もなきはぬいよりの候も
公承して申渡より女よほりつゝきり

大文入道朝大臣

ひと浦の候ありきよきと云ふは一考もなきはぬいよりの候も
家此方合より悉といふるをよきゆり

後系抄抄政家左大臣

神の政ひありきよきと云ふは一考もなきはぬいよりの候も
影より次

左近中将云朝

中規貯ありきよきと云ふは一考もなきはぬいよりの候も

系抄前開白家方合よ悉のり

大他云忠教

系一考もなきはぬいよりの候も
影より次

古師門田大臣

ほりなる風よきと云ふは一考もなきはぬいよりの候も
後系抄抄政家方合よ悉のり

讀ゆきり

前大僧正悉者

悉志の候ありきよきと云ふは一考もなきはぬいよりの候も
寄本悉

正三位家澄

寄本悉より一考と云ふは一考もなきはぬいよりの候も

今百首の合よ 栲宗使兼宗

今も手茶うりくえみしあまのまをいけりもなきがけり

百首の合よ 大炊内門右大臣

いづくともつる後のけりし次あいなむおまけつものめりお

皇太后宮女大炊内

いづくともつる後のけりし次あいなむおまけつものめりお

待賢門院坂河

いづくともつる後のけりし次あいなむおまけつものめりお

歌一ら歌 臣三位範宗

いづくともつる後のけりし次あいなむおまけつものめりお

恋のあまきく後ゆかりふ

春東貴季初長

偽りしは紫のくはふとくはつとくおせのめりお

子言書あ合よ まゆ

いづくともつる後のけりし次あいなむおまけつものめりお

源具親初長

いづくともつる後のけりし次あいなむおまけつものめりお

歌一ら歌 春永光

いづくともつる後のけりし次あいなむおまけつものめりお

津守初國

あるは海舟のそり月旦の歌はかく其歌をいふ

賀茂季保

お形せにわありやう逢ふ此昔のちよふりよふりや
稀會恋といふを續けり

淨意法師

おれは海舟の歌は玉のそりよふりよふりよふり

右清門督為家百首のそりよふりよふり

下節

かゝるのそりよふりよふりよふりよふりよふりよふり
開白左大臣家百首のそりよふりよふりよふり

後三位範宗

年取く逢ふは都のそりよふりよふりよふりよふり
悉十首のそりよふりよふりよふりよふり

権中納言定家

誰そに逢ふは都のそりよふりよふりよふりよふり
百首のそりよふりよふりよふりよふりよふり

後京極執政兼太政大臣

うしろのそりよふりよふりよふりよふりよふりよふり
建保六年日裏弁合り

前開白

目あふ風を吹あせうきつゆくさのむもをさへみたり

中納言定頼公の申とををたうそと申してゆかぬ

よりの 續く一ら次

あふ人のあふらとをせうはいさきいさあゆめゆらん

強直公亮人がおよゆらり時時奈年人ふて老の

いさう厚ゆわわ物人さる車のおよらりらる

あまのこひていさくは

あふての打をけいさくはいさくはいさくはいさくは

同人年人そらるる車にあとさゆか

本院の娘

その衣まさらうきふふ中納言はれりけり好てもいさくは

君よりゆけり秋桜窓文衣よつらりきり

天曆御製

そのよの書しはいさくはいさくはいさくはいさくは

更衣正地

その書きしはいさくはいさくはいさくはいさくは

女よゆらりきり 中納言朝忠

あつたりの若ふそらりいさくはいさくはいさくは

歌あつた 光孝王皇御製

あつたりの若ふそらりいさくはいさくはいさくは

和漢の書と戸とを平らに記するふあしゆりてを
述ハ物より治るるを記

法性入道新撰大政大臣

新撰水鏡よりけふかくと云来此たりのよ行記

は定式記

たあしはけりてくくあ鶴也あひくくふくあし

相模

我もふふとあしつ秋の秋あふふ風其書をあふむ

貫之

新撰とあしつ物とあしつふあしつるふあふあし

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

新勅撰和歌集卷第十六

雜歌一

まろくもあまの鳥乃とそくをたけの鳥の

選子内親王

山里の花あまのいれいれいあまの鳥乃とそくをたけの鳥の

須子内親王
藤原

若うと源の里に行人かよひもあまの鳥乃とそくをたけの鳥の

式子内親王

若うと源の里に行人かよひもあまの鳥乃とそくをたけの鳥の

入道二所親王
道助

あまの鳥乃とそくをたけの鳥の

春日野小舟のりもあまの鳥乃とそくをたけの鳥の

前大臣
正慈園

じうのたのまはさきとそくをたけの鳥の

歌一
次

般田院
太博

若かりてそくをたけの鳥の

子
白書
方合

二条院
頼成

さうぬい花とそくをたけの鳥の

歌
不知

按察使
隆衡

鹿くわのそくをたけの鳥の

権大臣
細云
家良

みくし野の山ありとてし春をいそがしく我れ年をたぐ
開白た大臣家百首を續けたり小菟とよめる

中まおね

さひたのまは葉は散るるまに露をそのまをよる山に

影とて源

賀茂成助

梅のむきこよ白ふらさくはゆさうふをまらるるさくは

壽永の比わい梅花とよめる

大寺内大臣

九重にかさぬ梅のむきこいさくはゆさうふをまらるるさくは

前白内大臣よめる

庭梅とよめる

源信定内大臣

宿る梅のむきこいさくはゆさうふをまらるるさくは

影不知

下野

五の月をよめる

初念法師

ひらく此の里つと白雲ありてはまぬ善風をゆく

百首より久のり春奇

侍臣具定

美乃月つとめりる梅をいそがしく我れ年をたぐ

大寺内院よめる

美明門院小宰相

いづれの春は月をかりん地をさるる春のめをうる種
東のよこはるのめをかり花と見ゆらん

お大納言忠良

いづれそと秋もよむ花のよをなほむしうなるはらなる
西園寺の三十首よりよめる春の

入道お大納言

梅嶺も花尾にもうとらん人の春の春をふかきと
花と見ゆらんをよめるゆらん

祝部成茂

春の春とあつた花は花を流さぬ春の春の春の春

題の初

お大納言

あつた春の春の春の春の春の春の春の春の春の春

花と見ゆらん

お大納言

いづれそと秋もよむ花のよをなほむしうなるはらなる

二葉院

お大納言

いづれそと秋もよむ花のよをなほむしうなるはらなる

お大納言

お大納言

世にのりておら梅霞寺にまうて梅のつらに大田
乃花の指しつらまはるゆきをを思ひつらふい見
ゆて頼政の許ふしつらふい

皇太后宮大女御成

いおのやまのたよきよのくちよとまへまふしつらふ
ち
三任頼政

雲のちのちもじつとあしつらふちつらふちつらふ
清長後とふちのちつらふちつらふちつらふ
ゆきつらふ
宗延法師

ふとつらふちつらふちつらふちつらふちつらふ

平重時

年おまへつらふちつらふちつらふちつらふちつらふ

源光新

身たつとつらふちつらふちつらふちつらふちつらふ

友原頼氏朝臣

ちつらふちつらふちつらふちつらふちつらふちつらふ

前大僧正慈光

身たつとつらふちつらふちつらふちつらふちつらふ

田右花といふちつらふちつらふちつらふちつらふ

梅意使意宗

いさしく花も君とてうらみの庭のきりぎりすにひかり

落花とよもゆかり 入道おとせ政大臣

花はさふあつらひ庭のきりぎりすにひかり

鶴とよもゆかり 侍臣具定母

あつらひとんわつあつとれ庭のきりぎりすにひかり

藤原信実の信

著てゆくは秋の生るるさつとよもゆかり別をいふひかり

大皇太后文久四月は嘆かろし撫をわけてつづいた

藤原前実白歌此後

まはらふ不契と記してさつとよもゆかりとよもゆかり

月まつるあ日あつとよもゆかりて女よゆかり

藤原顯徳の信

あつとよもゆかり秋のあつとよもゆかりとよもゆかり

秋不意 相模

秋をさして人をさしてあつとよもゆかりとよもゆかり

夕月秋にさつとよもゆかりとよもゆかり

上東門院小女お

あつとよもゆかりのあつとよもゆかりとよもゆかり

あつとよもゆかり 是も秋

あつとよもゆかりのあつとよもゆかりとよもゆかり

あつとよもゆかり

年一の徳きりしに女に月昔くはむきりせむ
そふよかよりく積ゆるり

右近大将道徳母

かたあは生物りしやあや草やまきこひさるりか

四や一

東三條院

あや草物しあはあきよふく修りし約しを五

思ふ事約きり法

持中御云定頼

かりあ朝の志所くにあはれをうけをよまき神を

かりぬと積ゆるり

右京新能知信

かきいりむいりしにむかりあはしこを積ゆるり

夏月をよあり

藤原親康

あはれ秋をむむかと思れあはの紫をいし月

物物のをと積ゆるり 祝部成茂

く風よ積るよ紫れこふは秋をの望を積ゆるり

権左衛門良徳

あはれ秋をむむかと思れあはの紫をいし月

あはれ秋をむむかと思れあはの紫をいし月

藤原信実朝臣

あはれ秋をむむかと思れあはの紫をいし月

あはれ秋をむむかと思れあはの紫をいし月

藤原季廣

初この勢をぬきとてなすれらるる病のむらり
實方の信義者殿のなまれ病と結してゆる
終せんとして女床より人のゆるり

後人を知る

船風のさるるをさく浪むすれん小むらり人なれ
殿と人ぬきせんたしとけりゆるりあひ見え
ゆるり

実方の信

風をす小作じとひらん花落るとは病をむらりし
後世院に出家の後分よりひらゆるりゆるり
いさゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり

ゆえゆゆるりゆるり

梅室使朝文

十時
たかお

秋の来とてとてかつ又書なく出たゆゆるりゆるり

ゆるり

右近大将源時

十時
右大将

虫の来小ころ浪に落れゆるりゆるりゆるりゆるり
後朱雀院に時祐子因親王痛つたよかゆるりゆるり
ゆるりよ月くまにれ親女床昔あし出てあゆるり
ゆるり梅にの女湯まゆるりゆるりゆるりゆるり
ゆるりゆるり

菅原孝標女

よはるををゆるりゆるりゆるりゆるりゆるりゆるり
中首よりゆるりゆるり 仁和寺二所親王守覚

ひしき腰の底よ庭うて九月廿八神のまはしりぬ
影不知 鎌倉右大臣

あらし京のつれなきをたぬよ氣く轉の月すん
思ひ出くじくとおはす神の上にあつたはりぬ月と
月前懐舊といふるうらむとくはるる

入道前太政大臣

なまめしうる方おふかがる世中よふくむじくの月を
家よお十首方うとゆるる秋行

入道前親王道助

この雲行の葉とびくあり月の昔おせくお氣をさす

え曆のはりしか美家重保くこのあすめゆくと秋
あ命のゆるる月をよめる

拾中細玄定家

このよとぬじくの秋とくはりぬあふよの月新
坐禪のほけふおれもすう月と結く雲やぬ
もつめいこののらりゆけ連

言弁上人

月影をるまふ山と日くはるもは厚き雲也いふ今ふら
後よこのあともをゆるけ連はよめる

法中題清

いづれもこれの月若晴よりんまの山をききあらし
世のついでにこの世の山は任のり時よあゆ

糸成成頼

高野山にまゝ人のいひはるのふたの月みま

疑不知

西行法師

あつとぬらふとそとくしん月とていととん松若心

法平慶忠

あつとぬらふとそとくしん月とていととん松若心

正三位家隆

あつとぬらふとそとくしん月とていととん松若心

源家長の臣

日守積一のいそとてを中よ六十た道なる神の月新

年延法師

く杖松のいそとてを中よ六十た道なる神の月新

侍姫具定母

く杖松のいそとてを中よ六十た道なる神の月新

殿留門院太胸

く杖松のいそとてを中よ六十た道なる神の月新

樂府と題あつくちよとてのり小陵園妾松を移る

源光行

少らざる深山に於て此松のたよりをまゝに記し置月外
至陽臺の心とよむゆけり

宗俊法師

日影くさくさの毎と成よらんまのふとを記し置月
古御月こゝろをよめる

法原道清

高きのはたけのまき月のはげ種志のそをかはらふらん
形不知

如新法師

こゝろ實にたねはるりの松の色はあはれしむるを記し置
藤原基經

佐保姫の柝ありてはるのつらき松のゆそくを

初念法師

新田のつらき松はるのつらき松のゆそくを
ゆ年叙爵とてゆきり松のゆそくを
ゆそくはるのつらき松のゆそくを

藤原永光

ふとれはるの松とてそのゆそくを記し置月外
高倉院河内をたつたをゆそくを記し置月外
むすむすの紅葉とてゆそくを記し置月外

建礼門院太皇太后

鳴風も技よのよとて代あはらぬ葉のなとて重
前白田大臣小伯きり時家よ百首あふと伯きり
善秋より
源有長初臣

紅葉のちういふ秋夕時毎道と好ゆゆく
建保三年八月合よ曉時毎といふ方合よ
権大納言忠信

暁とう丸一人が事とてうたかためく
源泰光初臣
源泰光初臣

かそせふとる時毎いふとてぬをれ
相摸

木葉らるる此風の吹よの波え
前大納言云々

りみりあも毎とていふとて
その比里に出く大納言三位よ

うた鐘より水あよれと新
三佐廣子

打ちぬみなりはるるの祥受ふはけしき鷲に群る

影ふ知

相模

そはよび相もかきよひあつとむとほ山をたふ種よふの来

六条右大臣小忌宰相よて出ゆよる胡小ほつり

康資王母

とん家うるぬおとごうや口ひつのがつるをふく歌とを

や

六条右大臣

つりてをく屋よりきりよとて家より口彩のこをくつり

新嘗^章会と後ゆり

中納言家持

あや葉の山下はくはかつらぬうるやゆふとむのさむ

百首あふ

次子内親也

と津風少とわらるるよれとてあま神をみく月新

お食の法持中納言定頼ゆふさういひつりつり

久人しん次

日ひさしとやら此をあらはしむとむいもてあるる月

秋事ゆきよるあつるゆきる雲此納言大臣交々

後成りといつりき

右近中おふ衛

冬こそは秋うたはしてさうとく君の中あをきつりつり

歌不知

伊勢大佛

長く見て年暮るつる冬暮れ多葉人そその縁をさる
かきあられおたさうたあじとるも昔ちれあつた

約けさハ

選子田新王家宰相

琴の音も昔れあつたよ引くはいつとあつたあつた
やー

選子田親王

こころの春のさく色にさしゆきあひくえくさる

歌不知

殷田門院太師

日つちも梅のさく色にさしゆきあひくえくさる
入道新王家あつたをたつたを續ゆきり

法平光寛

さくらも梅のさく色にさしゆきあひくえくさる
年の暮れいと續ゆきり

宗延法師

さくらも梅のさく色にさしゆきあひくえくさる
行念法師

宗延法師

さくらも梅のさく色にさしゆきあひくえくさる
相模

題さく次

かきしよ六年乃とらふ成よるの我乃乃とて我

ていふ

新勅撰和歌集卷第十七

雜奇二

影不知

業平朝臣

多神の事たつかり小あし神ももろまはるゝ病乃屋より成り
たよとていそそれたらよ屋の心ぞ我といふ一人一あま
よ又人あし次

智のよせの受て代志たよとて勅せしよし一年を命よる

和泉式部

いふ小又物をなむたふまはしてもなむつた河のあつた
いふと人あし下をたつた神のまもあしあま

相模

あまの来りてふふあつる露らりて花ありとて思ふとふふ
らふ思ふも中ふもかあぬあつる思ふとて思ふと

後頼朝臣

あつる思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふと
あつる思ふとて思ふとて思ふとて思ふと

春後

あつる思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふと
あつる思ふとて思ふとて思ふとて思ふと

成徳は仲母

あつる思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふと

述懐と後約なり

鎌倉右大臣

あつる思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふと

百首の中述懐

惟内親王

あつる思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふと

題不知

お大納言忠良

あつる思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふと

皇太子の言大支後成

あつる思ふとて思ふとて思ふとて思ふとて思ふと

よもの海と視の如きしるるもつる事ハ心をも辱む

源仲光

中未しからむとて我をうらむの如くは
年々の色ゆるり時とてゆく百を秋ふるゆるり小迷

懐奇

前大僧正慈因

所へと解すみとるゆと出せしるも切らぬ
影もなき

大僧正行基

かげりいなきいそめ世中にすふゆこころをちりらん
信正の意

信正の意

いふふ十乃故ふといふり都もさぬあつちせいに

必新法師

涙を流すもなきかたならしめてもぬく袖の

前京文後朝臣

とつるもつるいふこころの所ても昔くまふ人を見れば
昔年の如きいふかゆるん人ゆはるるいふ

後徳大寺大僧

あつた風吹やとをひしるるの種よりの心をさうこころあつ
大僧はゆるり所百首を積ゆけりに述懐奇

後法隆寺入道前白太政大臣

ふかふかそとにいふくささつらぬる氣をさしうらるる哉

本懐ありと後約あり

た近中お二箇

身はそよらあつたむいふ事ぬらあまのつう後なる次

題ふ知

後京極坊政前太政大臣

とてもはははあすじいさ中ふらあはるるをさる

年蓮は所

しんも又くようあせ間ふう後あはひのどと前ちり来

文集天可度わうあさうと約あり

藤原行能の信

且らこの塩干にいとらみをしんくうのあ後えあうしじい

志はせはつとて大京山みむら志あなうし小

信とら約きうは熊野山幸乃淨御信長執事所

の道かたれもより約と約よ出約けり小計由志志

約け道は横川乃木の陰小之らてよと約きう

法京聖堂

とらあ小山とさうあひ内事とらえよあをさうと

題不知 平泰時

昔中に麻あはれ成よりりあ後のまは孝道つとして

高倉院内侍人養せ平り事約ありふかされあうと

約あり 西行法師

あともめて古はとさうあをさうあはりてああうと

そのりねえとにまじりてあしをみたまふ
醍醐志山よのりて延在り汚邪をばらへ候の
ころ

中京竹季

名取とむのそはじりて小段のこもとらけ給て方か三
田大臣よゆりて家百首より小速懐りかを

前開白

河原とくけん邪人のこやうからりあとはそと給と
よれこも速懐りつらうとけりりりけみよ

汚邪

くをる一候のよもれとくしをばらへ者といひぬ
たあれ

速懐りて候ゆり 田大臣

いづよ疾とれとくみとらふあひくそ月をみか
定家よゆりゆり月あり候候中ゆり
尺のく初ふしつらうきり

権中納言定家母

みい道とそとらう月影よも我とらうの道はま
ちの白書りかよ 二条院讃岐

新とくをうらふ林の月影給りて毛也とらふん
後ろそめとらふゆりてあふふふふふ
源為相一鶴苑人也かうらうのれとらう候ゆり

續伯方

道信伯方

此の病の毛衣ぬき替へてはよきと云ふはいふこと
申すよ伯方事おちりて回るをせしむる回伯方
の事いふこと

後述云

此の病の毛衣ぬき替へてはよきと云ふはいふこと
申すよ伯方事おちりて回るをせしむる回伯方
の事いふこと

藤原相公

年々おちるをぬき替へてはよきと云ふはいふこと
申すよ伯方事おちりて回るをせしむる回伯方
の事いふこと

融院印象

あきまの病の毛衣ぬき替へてはよきと云ふはいふこと
申すよ伯方事おちりて回るをせしむる回伯方
の事いふこと

田大信

あきまの病の毛衣ぬき替へてはよきと云ふはいふこと
申すよ伯方事おちりて回るをせしむる回伯方
の事いふこと

権中納言宣家

あきまの病の毛衣ぬき替へてはよきと云ふはいふこと
申すよ伯方事おちりて回るをせしむる回伯方
の事いふこと

開白光大臣家百首よりつるる小咄を尋

百首のこゝろとつるるふくまきいぬよむふしあをれ
建保四年百首よりつるる

糸織雅抱

う積しつともほくろあし神文とてあまら城
日吉の社とて迷懐の心をよむる

正三位知家

あふ坂の中討ちを我こやとゆく人か泣よそらん
暁方とて積ゆる

前中納言直房

由とらまはぬもふ宿の長巻は名録つらう積よむ

按察使隆衡

鏡乃とて鏡方ふとて昔うと久きしつるをゆめ
糸織雅抱

存承宗仲朝臣

あふる月の鏡を糸とらりそつる世の夢れとつる
遠路也とつる

入道二所親重石助

とら山嵐乃みられは寝られ候りいそぬか子
暁迷懐の心を積ゆる

正三位家隆

にまほしきまほしきまほしき長巻の神定よまほしき鏡乃巻

法中定實

あつうとまほしきまほしき鏡乃巻よまほしき鏡乃巻

題不知

後頼朝臣

あつうとまほしきまほしき鏡乃巻よまほしき鏡乃巻

宋純法師

あつうとまほしきまほしき鏡乃巻よまほしき鏡乃巻

前泰成後恩

あつうとまほしきまほしき鏡乃巻よまほしき鏡乃巻

法橋行賢

あつうとまほしきまほしき鏡乃巻よまほしき鏡乃巻

源光行

あつうとまほしきまほしき鏡乃巻よまほしき鏡乃巻

家お十首万宋中地

入道二品親王道助

あつうとまほしきまほしき鏡乃巻よまほしき鏡乃巻

法三位範宗

あつうとまほしきまほしき鏡乃巻よまほしき鏡乃巻

迷懐方中に讀ゆり

侍候具定

あはれに... 實も著し... 言聲と... 約るる... 元乃後... たる... 約るる

上西門院武院

ふふ... 約るる... 約るる... 約るる... 約るる

影不知 ね模

月影... 約るる... 約るる... 約るる... 約るる

後頼朝臣

約るる... 約るる... 約るる... 約るる... 約るる

僧正... 約るる... 約るる... 約るる... 約るる

権大僧都権亮

法... 約るる... 約るる... 約るる... 約るる

高島法師

わ... 約るる... 約るる... 約るる... 約るる

若木田成長

か... 約るる... 約るる... 約るる... 約るる

壽永二年... 約るる... 約るる... 約るる... 約るる

平河盛

平河盛

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

は眼宗園

和歌ふふもいふれや水のあはれは

和歌法師

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

皇太后文久俊成

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

和泉式部

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

貫之

おはすの若ふもいふれや水のあはれは

あけを事ゆきうらた述懐の

後系抄抄政前大臣

ねりいは言敷きまゝみまのうや言ふら道としてん
是れは里のひらよあまももあまもあまもあまもあまも
あまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまも

鎌倉太大臣

あまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまも

新勅撰和歌集卷第十八

雑歌三

廿四のうらた後四月一日は服装裳と入りゆく

は成寺入道前抄政大臣

あまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまも

あまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまも

あまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまも
あまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまも
あまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまも
あまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまも

天曆中

新霜のうい曉よとくたの道は床もやまらふと海ありん
高之横河よゆきらふふさういゆりてふとゆけり

東三条入道格政之政大臣

あつとひ横川のあや田とたん源のゆをむじきるひま
お那し時恒徳公普清作よゆきらふかろりのおおふり
ゆくとろふといゆ大納言れをこしきうてまきくゆら
とろくく讀ゆきゆ

大納言師氏女 ふたえき

た運とみかお那し人のとれ山の井志ういゆを神の御言にゆ
右近中将成信三井寺にゆきらふて出家しゆよけり

将家来はつとゆきをゆきふじといゆゆきゆ
一條大長宅

なまはまをいゆきをらまらゆきらふゆはゆきま
母をなまひゆきをらゆきといゆきゆゆきらふ
まをてゆきらふといゆきゆらて後入つてゆきらふ

右近大将道徳母

ほらゆきまゆきをらゆきといゆきまを神の御言にゆけり
信朝の集とゆきらふのゆきらふてゆきらふ

中務

おれらのゆきまゆきといゆきまを神の御言にゆけり

少くとも地をうけて存する所はあつたといふ
ゆへに

大納言清隆

この世はとうとう終つてかゝる人の暮といふ事
後一條院の末といふ事と建武を始りする年の言
かゝるまよひのりくよ見ゆらる

権大納言長家

まゝいときくしをものりつゝいふ事
や

出羽守

あつて来年よきて毛かゝる物とつたを
九條大納言からまよひつゝ新嘗會の法内女房

よはつてきり 存承の文

霜枯のよはつての門よはつてその言の目録と
後言金殿くまを終つたり泰政雅清出羽守
ぬ武守に依りてきりあつて海よ京よまゝり出らるよ
しあつてはつてつゝ

内大臣

うはつてつゝ世の卵よ出ぬと毛をたすい
や

左近中将雅清

ゆへに身もた害状出ぬ事は知る
赤義の法内いあけ著之能く續ゆけり申ふ

権中細言回信

毛よりと事案此類のふくむ小なるも福と書かれ
かゝりて是れつとていふがまじし漢書に命をい
初中よ親とて海は焼塩をかくるありよとされし一
お形は若隆寺にいさつりてお葉とてよと約る

坂の院瀆波内約

お今とよつ候よえしむとや事案をうととよ由るらん
自信ふかれゆとせらからあまうりて後約けり

九條右大臣

ゆるり重むとてあはれたのうけとてまうりたり

天曆八年四月三日のまからまをせ給ひて廿七日

淨満押せと勢約るらんこれこのけに下よ

道徳のり

受かてあけとてまをせむらきよはむとてあいにれ

式程で教慶のみこがま道徳よりまふらん約る

中細言道徳

嗟むし風まのりてあをせし揚るまをせらひしうらむと

後冷泉院のいさふ小竹をり此類よりまふと女房ま

まふしにほつとてまふ

久細言道徳

いしく礼らるる者にして其の神の尊

形不知

貫之

と此を達し其の神の尊にして其の神の尊

人丸

みり神の尊にして其の神の尊にして其の神の尊

由りての尊にして其の神の尊にして其の神の尊

いりての尊にして其の神の尊にして其の神の尊

強徳云

白雲にすしやすと礼禮して其の神の尊にして其の神の尊

形不知

相模

神の尊にして其の神の尊にして其の神の尊

後京極極前大臣

とよりての尊にして其の神の尊にして其の神の尊

入道前大臣

とよりての尊にして其の神の尊にして其の神の尊

前大臣

とよりての尊にして其の神の尊にして其の神の尊

後重法師

とよりての尊にして其の神の尊にして其の神の尊

海有房朝臣

日くは神降の跡をみるも都あはれははたしめし

三位家隆

とらあもやふの巻とすのびるもはたしめし

なれん巻と佛よいはせゆるりふ

前大納言忠良

か形もはなるこいしははたしめし

歎もよきは是母のあひそこあはれとけし事れあひ

三位継子が事ゆきまら林の月氏をく讀ゆるり

入道前大政大臣

あはれあし又方かけりあはれんもろくも月をさるり

おれ人くをたしむるよは約きり

八条院高余

かたよた目ろあはれ西教のあはれとせし

公守朝臣母勇由りふらう時た大臣の許よけり

大納言実家

とてもたさるもあはれあはれとせし

後述大右大臣

なつとまうらんうまはれとせし

系水儀通宗朝臣勇由りて後つ子よかたけり

守りて母あはれははたしめし

大細言通具

百小なるこゝに... 皇嘉門政か... として... 後成... 許...

後法性寺入道前用白皇政官

少く... 母... 母...

内大臣

白... 周忌... 讀...

右... 左... 素...

賀茂重保

右... 後京...

右京親康

右... 賀茂重保... 賀茂重保... 賀茂重保...

ふよあり

覚感はゆ

ららじりてまのめつ宿と昔とそなむ影のそあつみゆ
そびのそてゆり水色迷懐とよをそ積約きり

藤原親感

かたのゆけよ昔思ひ出くるそむとむとふり井の水
影しゆ次

お久納玄克頼

ゆけのびすまよふゆら井のいりまそむとむとあつん
むらぬ母の身まうりつらふ積約きり

は中覚寛

ゆきまらめつ身をあらく其後を道にうぬ列をいそ思ひ

懐る念改くまそ改く年く色約ぬ事とこいいて

積約きり

平信盤

とらゆし歌ありふ年をいぬとあめはるのそあり
光の後迷懐より久約きりふ

能蓮はゆ

とらぬてそぬ命を恨めとあそ積約ゆとそあり列る
入道大納言ありひゆりつり時と約けり

た近中お基良

物とそ思ふとふとあそ積約ゆとそあり列る
僧正範玄ありゆりつり時と約けり

うーとてまうらりのゆるき家付より

は平倉控

ふふんその本流の折るを未集し一箇の疑ふり

小竹屋よりふらうに記するゆる

は平倉控

うーとてまうらりのゆるき家付より

大津基賢よりゆるふらう時補控せしゆる

續ゆる

中後右大臣家より

別うーとてまうらりのゆるき家付より

八条院から道々を記しし日八月十六日

てゆるきふらうのゆるき家付より

藤原信実別後

園よりゆるき家付よりゆるき家付より

父よりゆるき家付よりゆるき家付より

ゆるき家付より

平泰時

ふらうのゆるき家付よりゆるき家付より

ゆるき家付より

連生法師

からゆるき家付よりゆるき家付より

文集親愛自零落者仍別離とてゆるき家付より

八条院より

花鳥川集の御歌もつらねるうぬも積約のまじ

臨不初

初念は師

ゆゑの好きせふうらやしくも其まの御歌あすからん

詔恩誨といふ事をたこあいのりふふれりるを

かきよひし初く積約のり

前文信正慈念

り為人のうらやまぬ若うもつらや言れこい定言六

今ん

新勅撰和歌集卷第十九

雜歌

彦子院大内山よわつゆもつら内勅使あきげりて

ゆきも小ゆりこもつら此まのありつらをかて積約のり

中納言益備

白雪丸九重いふ山宮なまは大内山といふよそありけり

題

よみ人

山城乃をのこれはつ御代より言はをえはく村公をさり

久遠のまこれあまふさるうとよそよみ人のまきり

みのあふふ志都を意にかりたはま人のうらやまの御歌は

春日社より百首を讀み奉りし小揚子

皇太子を奉りて後成

都に伏せしとてゆめをいふ是らりきほひつかりの揚

百首讀らるるに早稲子

由大臣

吹たむらさきといかき連し一を其心現る松のあきの祝

建保元年百首を奉りし時

信正行意

山志の松の心の中を多そあぬまらよ松の葉の

名取のうらむるよ 兼身法師

下第をいそりあかるとんたあぬまの松の葉下り

去昭法師

あきの川河せの雪を晴るていそあくと松の夕風

題不知

よ久人あつ次

そ中あつて大和のあつては河又あれをあつてあつて

中納言家持

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

入道あつて政大臣

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

正三位家隆

ふゆの侍の世のむよき書てかゝの歌のうらひねん
方言自家言合ふ老お月

源家長卿臣

はくせのうらみよきみことらありていづくはる月歌

百首言種竹多

後京極権政方太政大臣

久世乃そ丹小みよ一侍約山言はつと久の方とあり

鶴志うり次

よ久人志うり次

ふ海ありておいはゆん位のはれ老よありてふ無子建

和泉式部

恒吉乃をぬき月をすまじしはつと久はるうり小新れ無し

身も後の世にふはるうりまうりて恒吉乃はくせ

種竹多

一條太大臣

すえう此浦は吹あふ所を塩を自れの花を咲か

不形一書書よたふの浦あり種竹多

大宰権帥云卿

難ぬく塩を海の方書い書る能るの歌は流る

種竹多よきうり

よ久人志うり次

不ぬく音ありてはる推うりありてありて

若雨ありてはる中書一の巻

正三位家隆

うしつれりもいぢりたはるま意方なけりもあはれにわらふ心

布引の湯よりあつ 春永の徳朝臣

布引の湯よりあつてわらふ心とていふ人ぞくよふあはれ

百首あふ紅葉とてうらむら

入道おと政大臣

さし系まへこのまに候てらりゆあはれけりい乃杜

伊勢国ふゆの母い久の徳き

安貴王

おせの海はあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

正三位家隆

伊勢の海はあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

久我の直家

秋あつて成よりあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

春浦月といふあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

家長の信

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

中務

拾ひありの中子に新しきとらば是よりにててをいふ
兼用白家言合若和月を録的きり

正三位家隆

ひりき末妹の月よならき秋をかほはのさあ申ふ

存承之俊朝臣

澄き海をえきう一白妙乃海かた一の秋乃月

形不知

よん人しん次

あしは演名は橋をいでみよ下ゆくあよ新とまわ

平慈盛駿河守にちりてそり約る付録のり

大中臣能宣朝臣

よちり

ゆきをり自宮にゆり此面去乃山より毛はらぬをまじ

二所法親王あみし首より

仁和寺二所親王守光

画云のひらとてを免ふとくまらるやうに母をり白雲

春取百首よりつりつり

嵯峨三位範宗

ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら

形不知

相模

はなを好むすのか好むしは漢のうまてんか成海よりか

百首より

後京極権政前大臣

あからるる雲霧さやうらやふしむかたしほ霧さう

鶴さう歌

小町

ひうせむじりの思ふ事あつた縁さうさうさうとあはれ

よかん人さう歌

かひらうのまうらうまは清舟に船人さけく浪さうと

前大僧正慈念

かひらむじりのまはつと橋と早道浪さうとさう歌

和らふゆらうてよえゆらう

徳因法師

よせむのさうさうさうさうさうさうのさうさうさうさう

天禄元年大掌合悠紀沙麻風高
清原元輔

わらうの浪りさゆれさうさうさうさうさうさうさう

さうのさうさうさうさうさうさうさうさう

前大僧正慈園

大さけのさうさう風さ霧晴てかえの山さ月ささうぬ

鈴不効

鎌倉右大臣

さあさういれさうさうさうさうさうさうさうさう

糸織雅經

花さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

伊勢勅使して甲斐のじまをよ付約る日

後京極権政奉太政大臣

と頼朝の女との山嶽とよふひく官せりる想は此の故

歌一う次

よ久人一う次

い海文よりい海乃おれくえうに彩をん物ありけくよ

兼蓮法師

少くさかり木曾共あさ衣袖舞てみくぬ彩をん物ありけ

ふみりあよようるにげり人ぬを彩物とより約きり

深有教朝臣

志つぬよ漢方共きけの物より元年くく借ぬさいあけは

歌一う次

徳一人一う次

くられくよあうといふたふむ川の毎よりふにいひんて

深奥書にゆりる時忠義云共をいふりより約きり

深信朝臣

内言いよられたの福とありあう都にゆき移成のうそあく

歌一う次

よ久人一う次

いふ来とをいよそれ山の音ふせりる弟ありてそを彩をん物

若取あまきこい久人のうらりよ

清博朝臣

まはる人のあまきあう浪のきくちりこゆりす思ふ心まはる

歌一々次

秋詠成歌

あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと
寄歌無とよあり 寂処は所

あふ山木葉とつれ下弟にあつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと

歌一々次

平政村

あふ山木葉とつれ下弟にあつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと
つれ下弟にあつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと

源信の朝臣

あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと
あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと

あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと

あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと

歌一々次

久保の朝臣

あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと
あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと

田久臣

あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと
あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと

歌一々次

大納言格人

あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと
あつちのつきのまのや木枯とそ月をわたりてつらうと

後京極権政前太政大臣

浪うれじいあひのせいにゆく舟のちかきせよ沖の塩を

入道お太政大臣

去朝のや舟の鴈もくまの浪をうむるをみれば

友人あきつ

いもろにやむとじろよと紙の田の中をみれば二首は
もろり舟具もきくくしりうの浪がうるの浦ふきうのうら

正三位家隆

時いも建の橋とそむる言風の吹とぬ海はうらうらと

名取の積物うらふお泰次教長

吹ふう吹との浪乃と海風よすもろぬ電とつと

坂川院よ百首うらむけり時山斎

控中納言圓信

あさみよりかきかんとしうらうらとむるをきくとあぬと心
百首款眺望のうらむをうらむ

入道前太政大臣

よみか海といひ川よきまの浪の首は山乃橋あり

七条院大納言

河能野のうらむれ松乃臣留葉の毎にけぬはれとら中

後東極極政家百首よ草うら十首うらむる

兼運法師

風よけの濱おろえのち向草露よりそらぬこらうらめ

家小十又首より久作も方に映霞隔浦といふ方

をと積徳のり 中次入道右大臣

あんなら海にうらやまたらそらぬまうらこむら夕暮れ

和方両方合海と藤原前田大臣

淡路海より乃瓶を俺くかす久といふ言乃舟人

影ぞう次 積人不知

あうらあまの娘やまのそと物塩のかりた急とを我いすの舟

茶志海雲のうら塩倉といふ海よりそらぬまうらこむら夕暮れ

お久信正慈秀

あまの杉浦乃たそらぬ久のれ出くそらぬまうらこむら夕暮れ

秋山麻といふ方乃をよ久作のり

正三位知家

あまの山色がらゆゆ林風よかまあうらそらぬまうらこむら夕暮れ

新勅撰和歌集卷第二十

雜奇五

源政長朝臣の家おそくをりて予續傳をりし初冬
本懐といふる心越より歌

源俊賴朝臣

や海にほ 冬にさふ かなしきれ 庭よりゆふ
こころの こゝろは行く こときげん 庭に花をさふ
ひまはれ 時をさふ ちか思ふ 正木のかほ
あまより には秋の なつこは ちかつひく
くさえ 君ふより 霜より 弟集のうら

はつらき されよきや ちかふよ ちかまらん
我とまらん

いづるをりたきしつてをそは秋のちかよりきき
久安百首をきけりちかより

皇太后太后文俊成

春のや 庭をよき風の 吹はるる
この葉は 秋の代りか ちか行の ちかにあきて
ちかをよき ちかをよき ちかをよき ちかをよき
ちかをよき ちかをよき ちかをよき ちかをよき

かきしきく 言の海をも ずと毎次 日らり浦人
扱そひて かりかろ瓶 立ゆさり 中く来たての
たりとえん さまの卵も きこゆたろ 二しをねんて
あつ代よ あつ代は うちし木と みるにうね
じり通母の あつ代は かりかろ みるにうね
あつ代は かりかろは かりかろ ねんてねん
まろやま かりかろは かりかろ かりかろ
未だ通母や かりかろは かりかろ かりかろ
あつ代は かりかろは かりかろ かりかろ
かりかろ かりかろは かりかろ かりかろ

さしにちり 居の志と家 ねんてねん 言のわりあ
こころとく ねんてねん かりかろ ねんてねん
いへんやま かりかろは かりかろ かりかろ
月ひたを かりかろは かりかろ かりかろ
ねんてねん かりかろは かりかろ かりかろ
あつ代は かりかろは かりかろ かりかろ
かりかろ かりかろは かりかろ かりかろ
立ちあがり かりかろは かりかろ かりかろ
かりかろ かりかろは かりかろ かりかろ
かりかろ かりかろは かりかろ かりかろ

反奇

山深のせこれにけし清くうらむまゝ余の君にけしれ

清嶋の信

あし福ふ	是身はれど	はまのあく	なほいもさか
とくつ	ありかろを	うきうき道	うきにあのの
このせよ	そらくまは	ゆきたぐ	ありかまうふ
朽えふ	ふ代よてい	きく花の	まはれかろよに
いそふは	きふあまに	ありとふ	朽木乃朽
くらめろ	さるじの果	たふさげ	思いてうら
呉竹の	未れをまて	あつ穂き	うらふとつ

こはさく	こころあ	さかかられ	おらもあは
とくあま	さくさく	さくさく	木の下のま
ゆきあろ	あまれをよ	まきせり	かきあはあろ
朽葉あ	うらまみ	伊智の海	あまのきく
ありれせよ	あうらん	あうらん	

と西門院無清

言はれ	枯らみ	あ	心をさあ
とくせ	風よこ	あ	あいら
あふこ	ひうま	あ	うたをふ
あうて	あふれ	あ	ほり

あつとて ねほれまゝ くらげの かげんくの
くしをた くらげのまふ くらげの くらげのま
ねろぬれ

権中納言通俊からつゝの歌あゝ旋頭より人作

くらげ小恋乃をよちり

俊頼朝臣

くらげのまふまゝの くらげのまふまゝの
くらげのまふまゝの

くらげのまふまゝの くらげのまふまゝの

くらげのまふまゝの くらげのまふまゝの

くらげのまふまゝの くらげのまふまゝの
くらげのまふまゝの

百首よりまふまゝの

清浦朝臣

くらげのまふまゝの くらげのまふまゝの
くらげのまふまゝの

物名

くらげのまふまゝの くらげのまふまゝの

くらげのまふまゝの くらげのまふまゝの
くらげのまふまゝの

あふふ *あふふ*

うけむら神をさかめくつぬるに海をむね投りてまき

すまとい 躬恒

あふふ *あふふ*

あふふ *あふふ*

あふふ *あふふ*

あふふ *あふふ*

あふふ *あふふ*

あふふ *あふふ*

あふふ *あふふ*

あふふ 於中絶云定頼

あふふ *あふふ*

あふふ 後頼朝臣

あふふ *あふふ*

あふふ *あふふ*

あふふ *あふふ*

あふふ 大炊御門右大臣

あふふ *あふふ*

あふふ 大京大夫右大臣

あふふ *あふふ*

かろあす

清浦朝臣

とらんもほきてゆめくもあつふふとこれ相承るなり

あつふふ

花園左大臣家文進

おもしろなるもくかまぬつ冬草も忘やうかひも榮えお

わろあつふふ

三任頼政

むと也葉のほくつとほくつとのみ海乃ほと城さる人のあし

あつふふ

基俊

ちるあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふ

物名を積ゆきりにやまはつふふかろ

後述大右大臣

あつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふ

あつふふ

殷富門院大輔

あつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふ

あつふふあつふふあつふふ

原存仲

あつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふ

あつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふ

鴨克重

あつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふあつふふ

... 推大紀云云 實の許よ...
... 後頼朝臣

... 小山田... 後頼朝臣

... 後頼朝臣

後頼朝臣

... 後頼朝臣

橋廣房

... 橋廣房

後頼朝臣

... 後頼朝臣

二条太皇太后

... 二条太皇太后

... 二条太皇太后

春乃とく少小這家よあしむるはみく小信正
聖賢を以けし先をそとてあえなるをくけし
乃ち乃ちとくゆるくわりのゆるけしは乃ちよまじと
中て候ゆる旨

大信正親殿

そり祿のいほちるはれりしとこせき色なる小松よ

あつてえん旨

(Faint bleed-through text from the reverse side)

春のふりしるすをみれば
あはれなるものぞ
あはれなるものぞ
あはれなるものぞ
あはれなるものぞ

又信ふれぬ

あはれなるものぞ

あはれなるものぞ

